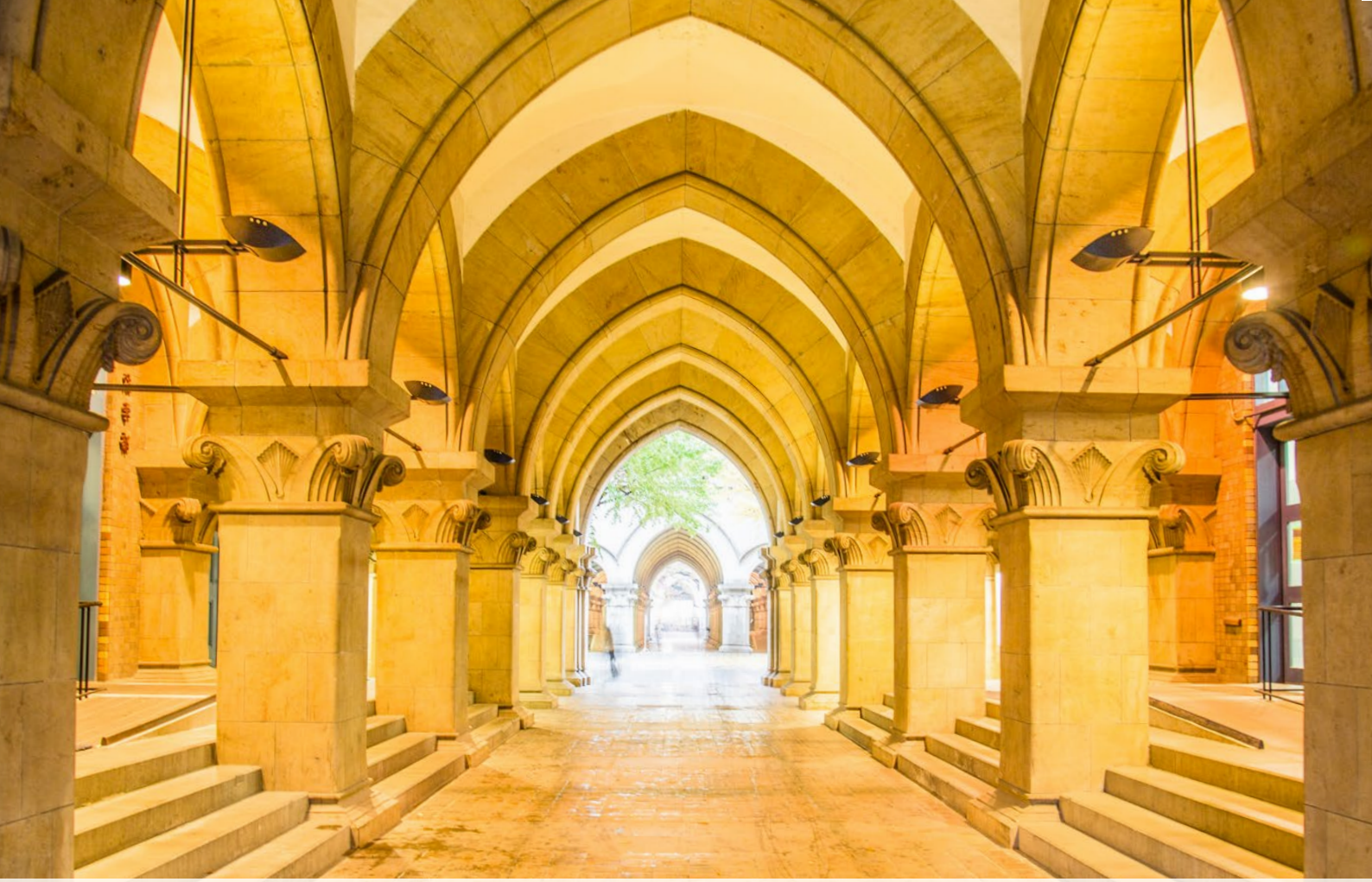

表紙モチーフについて

近年の本報告書では、東大発の知財やイノベーションに深く関わる生き物を表紙モチーフとして取り上げてきました。今年度のモチーフは「ミツバチと花」です。自然界においてミツバチは、花から花へと花粉を運ぶ「クロスポリネーション（異花受粉）」によって、豊かな果実を実らせます。これは、大学が生み出す「学知（花）」が、知財・事業化の専門家をはじめ、経営人材、投資家、産業界、行政など隣接分野の多様なステークホルダーとの共創によって社会へ届き、豊かな未来を紡ぎ出していく姿そのものです。学知を社会へ運び、その成果を再び次の知の創造へと還元する持続可能なイノベーションエコシステムの姿を重ねています。

p01　ご挨拶

1. 活用される東京大学の知的財産

p02　学知を社会へ運び、豊かな未来を紡ぐ ―東京大学のイノベーションエコシステム構築と新たな推進体制

2. 東大知財の社会実装事例

p04　コウソミル株式会社：異分野の「学知」の融合とインキュベーションが拓くがん早期診断の未来

p08　株式会社建帛社：食事の種類ごとに栄養学的質を評価するExcelアドインソフト簡易食習慣評価ツール「MDHQ」の誕生

p10　日本電子株式会社：産学共創による革新的電子顕微鏡技術の創出とOBF STEM法の社会実装

p12　ナカ工業株式会社：可視光応答形光触媒技術が生んだ「ウィルアン®」の挑戦

3. TOPIX

p14　東京大学・三菱商事Tech Incubation Palette（T-Palette）：東京大学の有望技術の事業化を一気通貫で支援

p16　TIME TRAVELER株式会社：健康寿命の延伸を競う国際科学コンペティションXPRIZE Healthspanで世界TOP10に選出

4. 東京大学の知的財産活動

p18　東大知財の現在地

p19　東京大学の知的財産活動実績

ご挨拶

『東京大学知的財産報告書2026』の発行にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

現在、大学における知的財産の役割は大きな転換期を迎えています。大学の研究活動の根幹は真理の探究や新たな知の創出にあり、それ自体が不変の学術的価値を持っています。一方で、そうして生み出された豊かな知的資産の中には、社会課題の解決や新産業の創出へ活かされてこそ真価を発揮するものも数多く存在します。単に特許等の権利を取得・保有するという従来の「知的財産活動」にとどまることなく、今求められているのは、生み出された知的財産をテコに社会へインパクトをもたらす「総合的なプロデュース」を展開し、持続可能な「イノベーションエコシステムの構築」を強力に推進することです。その推進体制としてこの10月には「株式会社東京大学産学協創推進機構」を設立いたしました。

研究成果を社会に届けるためには、「研究活動における早期からの知的財産戦略」が不可欠です。特許は「後から後悔しても遅い」ものであり、研究の初期段階や起業構想の段階から、適切な権利化を意識する必要があります。研究者自身が自ら事業化や起業を力強く牽引していくアプローチはもちろんのこと、早期からビジネス化や知財の専門家とタッグを組み、互いの強みを活かして推進していくアプローチなど、社会実装への道筋は様々です。専門家が研究者と二人三脚で事業化から逆算した権利化を行うことで、将来の事業を守る強固な知的財産権を確保し、社会実装の確実性を高めてまいります。

イノベーションの難所を乗り越えて研究成果を大きく育てるには、研究者個人の努力だけでなく、知的財産や事業化の専門家が初期段階からチームを組んで強力に伴走支援する仕組みが欠かせません。さらに、エコシステムを真に機能させる鍵は、知的財産関係者や専門家にとどまらず、その「隣接地」にいる多様なステークホルダーとの連携にあります。経営人材、投資家、産業界、行政など、隣接する多様な分野のプロフェッショナルが日常的に関与し、研究者と共にチームを組んで事業化に挑む体制こそが、日本におけるイノベーションエコシステムの本質です。このような「新しい体制構築」を果敢に進めてまいります。産学協創推進本部では、専門家や隣接分野の知見が学内の多様な研究領域に届き、誰もが果敢にイノベーションへ挑戦できる環境整備を一層推進してまいります。

本報告書が、本学の取り組みへのご理解を深める機会となれば幸いです。今後とも皆様からの変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

東京大学 執行役・副学長／産学協創推進本部長

染谷 隆夫